

10. 鉄工所の成立と発展

木村 隆 明

- I はじめに
- II 鉄工所の登場以前
- III 鉄工所の登場
- IV 移転・拡張
- V 後続者達
- VI 鉄工所と集落での生活
- VII おわりに

I はじめに

吉原釜屋に現在ある工場は、繊維関係が10軒、鉄工所14軒、その他が2軒である。鉄工所のうち、8軒が、吉原釜屋の住民が経営する工場であり、残り6軒は、他の集落の住民が吉原釜屋内で経営している鉄工所である。つまり住民のほぼ一割が、同じような業種の工場を経営しているのである。吉原釜屋の住民で鉄工所を営んでいる8世帯は全て昔からの住民であって鉄工所を持つために入ってきた人達ではなく、それ以外にも、他の集落に家を構えてはいるものの、吉原釜屋で生まれ育った人の経営する鉄工所が1軒ある。

会社勤めを除けば、吉原釜屋にみられる主な職業は農業と繊維関係の工場の経営と鉄工所の経営である。しかし、既に専業農家は3軒ほどしかなく、繊維関係の工場も後継者はいるものの、新たに始めようという動きは見られない。¹⁾この点からいって、鉄工所は吉原釜屋において重要なものである、ということは明らかである。

そこで、本稿では、鉄工所群の成立の過程と、それらの経営者の間、そして、周囲の人々との間にあるものについて述べることにする。

II 鉄工所の登場以前

1945年に太平洋戦争が終結した後、その焼け跡から復興してきた工業は、労働力を農村から補給した。この時期に、当時の吉原釜屋の人々の幾人かは、集落外の人が吉原釜屋内で経営している鉄工所か、集落外の人が集落外で経営している鉄工所を仕事の間として選択した。それらの鉄工所は、機械工具や、工作機械を作る小規模なものであった。もちろん、そのように小さな鉄工所を選択した人達が全てではなく、このとき、小松製作所（小松）に勤めていた人や、大東産業

(焼釜屋)などの大中企業に勤めた人もいた。この人達は、そのまま勤め続け、現在は退職して、農業をやっている²⁾。つまり、この時期が、自営業になるか、勤めに出るのかの分岐点に当たるのである。ここで小さな企業を選択した人が、大体5～10年の勤めを経た後に吉原釜屋内で鉄工所を始めることとなる。しかし、この時期には、まだ勤めの傍ら農業が行われており、いわば兼業で勤めをやっていた。

Ⅲ 鉄工所の登場

吉原釜屋に鉄工所が建てられたのは、1970年前後である。この当時に、それまで兼業で勤めをやっていた人の多くが、専業として他の何等かの仕事を選択するようになった。この場合、吉原釜屋では、選択肢は繊維か鉄工であった。そして、基本的にはそのとき自分が勤めていた業種に応じて、自分の仕事を選択したという。

1971年、5月31日づけの中日新聞の、根上町に関する記事は、当時の様子を次のように伝える。「町の基幹産業はなんといっても二百近い業者を持つ繊維業界である。…そのほかの鉄工、建設、商業についても金融対策を基本とした不景気対策、経営の合理化の技術指導に力を入れている。このために不況打開を中心とした不景気対策の原資として、町では一千三百万円を金融機関に預託している。…こうした行政とタイアップして、各種団体や組織の活動も活発である。町の商工行政を一手に引き受ける商工会は、…年間八百九十万円の予算を組み、町当局の協力をえて不景気対策の第一として金融を上げ、融資の増額をはかっている。経営技術の向上のため講演会はもとより、工場診断を行い適切なアドバイスをしている。」

ここにかがわれるのは、当時、不況の余波を受けて経営が逼迫していった、中小の繊維業界の様子である。一方、鉄工業界は、不況の打開の緒となる期待をになっていた。ここきて、鉄工業界側が、以前であれば農繁期の休みを補償した上で採用するのが当たり前であったのが、一度就職したら休んでもらっては困る、というようになったのである。また、上の記事にみられる通り、町全体の不況打開を目的とする融資などによって、近代的な機械の導入が進められていく。その結果として、工業高校を卒業して専門的な知識を身に付けた若い人々が就職してくるようになり、それ以前から農家の副業として勤めていた、専門的な知識を持たない人達の給料が頭打ちになった。この様な人達が、鉄工所に勤めていたときに身に付けたある程度の鉄工の技術を生かして、独立していくようになるのである。

独立の初期の1970年前後の段階では、鉄工所の仕事の内容は、立派な機械をいれなくても5～10年間の鉄工所で見習いをした経験を用いてできるようなもの、例えば旋盤加工などであった。そのために、元手もそれほどは掛からなかった。この時点で鉄工所を設立した人達を「先駆者」と呼ぶことにしよう。この様な鉄工所は5軒ある。この中には東京などに勤めに出て、その後、吉原釜屋に戻ってきて、集落外の鉄工所に勤めた後、鉄工所を始める、という例がある。

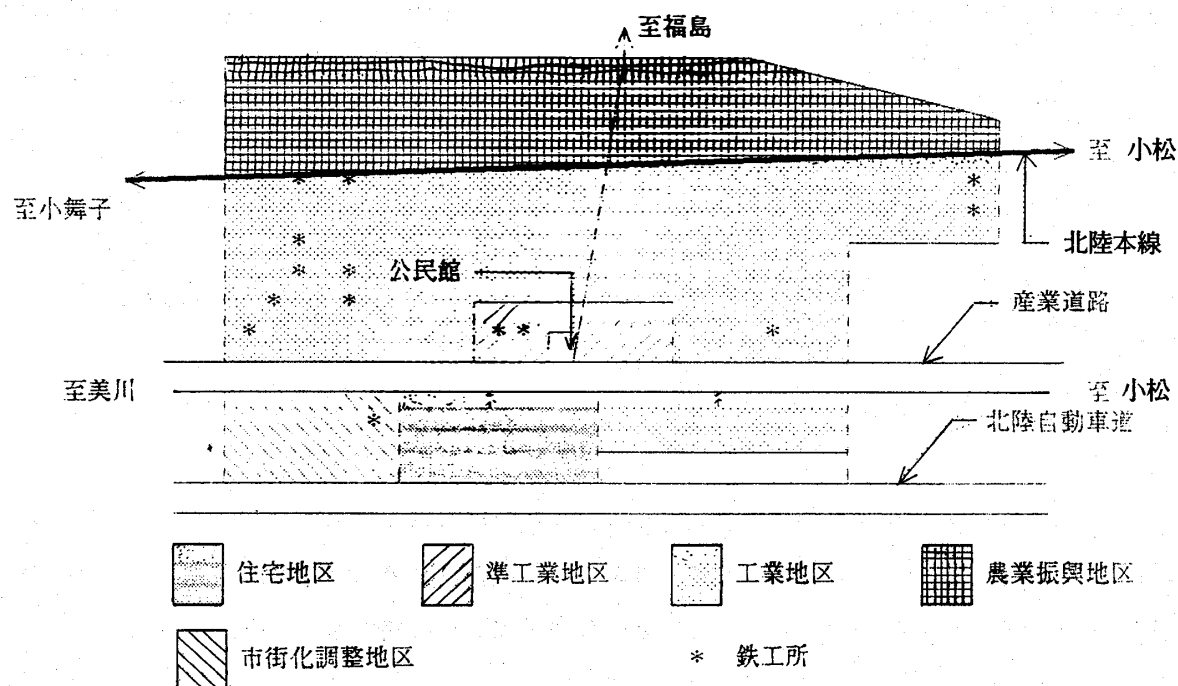
また、当時、根上町には新たな道路網が整備されつつあった。『根上町史』によれば、「根上町西部の砂丘地は、工場誘致などによって開発され、近年市街化が進んで、これら地域の開発と市街化を促進するため、1955年度において砂丘地を縦貫し、隣接市町村と連結する街路網が変更決定され、1962年度根上―美川線、1965年度根上―安宅線、1967年度道林―高坂線が着工された。根上町を縦貫する唯一の地方道として、金沢、小松、加賀線の交通公害に対する不安の解消、また、北陸自動車道路、小松インターに最短距離で結ばれる重要な道路として完成した。」³⁾これが、産業道路と呼ばれている道路である。その道路によって吉原釜屋は鉄工業の加賀地域での中心である小松とつながり、鉄工所は、その産業道路の完成と歩調をあわせるようにたちはじめる。このような条件を生かし、様々な得意先を、例えば、美川や小松などに持つようになった。

吉原釜屋の鉄工所の仕事は、小松製作所との関係が深く、大体、小松製作所の下請け、2次下請けが多い。すなわち、吉原釜屋で加工されたものが、納品先にいき、そこで加工を受けた後に小松製作所にもちこまれて製品化されるのである。この初期の段階では、町なかで鉄工所を営んでいたが、音がうるさい、ということで周囲から苦情が出たり、また、そのことで他人に気兼ねしながらやっていた。

IV 移転・拡張

現在土地利用区分は、もともと1959年に根上町が独自に土地の利用計画区分を打ち出したことに始まる。そして、1975年に、隣接の小松市、寺井町とともに国の「小松能美郡都市計画区域線引き制度」の指定を受けた。これは、広域的に市街化区域と市街化調整区域を線引きし、乱開発を防止するものであった。

図－1 吉原釜屋地区都市計画区域線引き（1975年）



吉原釜屋で実施された線引きは、具体的には図に掲げた通りである。住宅地区は、住宅として使用される地域であり、ここでの工業は基本的に禁止されている。準工業地区とは、工業地区に準じて、住宅と、工場がまじりあって存在する部分である。工業地区は、工業が行われるべき地区というよりも、それは、おこなっても良い、という消極的なものである。農業振興地区は、基本的に農業が行われるべき地域である。この結果として、それまでやっていた場所が住宅地区あるいは市街化区域に指定されることとなり、住宅と隣接した鉄工所は、歩調を合わせるように周囲の人に音を気兼ねしながら操業しなくてともよい準工業地区、工業地区へと移転を始める。

吉原釜屋の住民が経営する鉄工所は、この準工業地区に2軒、工業地区に6軒というように散らばっている。また、美川よりの北陸本線ぞいの部分には、8つもの鉄工所が集中している。その鉄工所群は、集落内に住む人達の経営する鉄工所3つ、そして、集落外の人達の経営する鉄工所5つで構成されている。それは、輸送を鉄道貨物に頼っているという理由ではなく、土地の権利の関係であると思われる。そこには、土地の交換や、土地の売買にからんだ理由があるようだ。

新たに工場を建てる土地は、なんらかの形で以前から関係を持っていた人が持っていた土地か、あるいは、自分が耕作していた土地であった。それを安く分けてもらったり、借りたりして、鉄工所を始める、というのがパターンとなっている。親の地面であったり、従兄弟がやっていた鉄工所と地面を交換したり、もともと畑を作っていた区の共有地を借りたりしているのである。例えば、ある先駆者の例では、もともと畑を作っていた区の共有地を1974年に安く分譲してもらった。そのときに同時に他の人の田であったところの権利を3枚分買って、現在の工場の敷地とした。また、その際、業種を拡張したり、業種の選択を直したりしている。

この時期の工場移転に伴う移転用地については、商工会からの融資が受けられる。言い換えれば、その融資をもとで、事業の拡張ができるわけである。既に手狭になりつつあった工場を拡張するチャンスである。しかし一方では、工場拡張によって、浜の水質が悪くなったり、車通りが増えて騒音がひどくなった、など、良いことばかりではない。なお、この時期に、工場誘致によって、セキスイ樹脂石川工場や、北国合繊根上工場など様々な企業が吉原釜屋に進出してきている。

この時期の移転拡張によって、吉原釜屋の鉄工所は、現在のような鉄骨や、自動車のフレームや、立体駐車場の駆動部製造など、より複雑なしごとをするようになった。現在の取り引き先は、野々市、鶴来、寺井、美川、小松などにおよんでいる。

V 後 続 者 達

上に述べたような鉄工所の移転拡張の時期、すなわち1975年前後から、新たに3つの鉄工所が、先駆者達の鉄工所の後を追うように建ちはじめる。この中には、1例のみであるが、繊維関係の家から、鉄工所勤めを経て鉄工所を経営するようになる例がある。この人が鉄工所に勤め始めた

時期は、1970年前後であって、Ⅲでのべた時期と一致している。

この後を追って鉄工所を建てた人達をここでは後続者と呼ぶ。彼等に共通しているのは、独立初期からある鉄工所の経営者達が集落外の鉄工所、あるいは集落外の人経営する吉原釜屋内の鉄工所にまずはじめに勤めたのに対して、この人達は、吉原釜屋内の人が経営する鉄工所に勤めることが鉄工所経営の出発点であることである。もちろん、前者の場合には集落内の人経営する鉄工所がなかったからという理由でしかないかもしれないが、後者の場合は、集落外にも鉄工所はあるにもかかわらず、また、吉原釜屋内にある集落外の人経営する鉄工所が6つもあるにもかかわらず、集落内の人経営する鉄工所からスタートしている。この、後続者達は、先駆者達とこの様な点で区別できる。

先駆者達は、様々な部分でその経験を役に立たせて、後続者達の面倒を見ている。例えば、鉄工所自体を建ててやったり、取引先を紹介したりなどである。彼等の間にある関係は、例えば、その鉄工所を始める際に、もともとの勤め先の経営者である先駆者が、時計をくれたりするということにも垣間見れる。また、後続者達のうちの一人は、独立して始める前日に、吉原釜屋の鉄工所の人や、身内を呼んで御披露目をした。

後続者の独立に際して、先駆者が面倒を見るということは上に述べたが、加賀付近の鉄工生産の中心ともいえる、小松の影響も見逃せない。ある鉄工所は、小松製作所の社長の声がかりがきっかけて経営されるようになったものである。

また、後続者の資金に関しては、例えば、全て自分の資金で建てた、という証言にもみられるとおり、それほど立派な機械を入れずともできることもあって、ほとんどが自己出費である。ま

表-1 歴代町内役職者の職業

年 度	町内会長の職業	壮年団長の職業	公民館長の職業
1969	無 職	?	
1970	自営業 (機場)	?	
1971	無 職	?	
1973	自営業 (農家)	自営業 (農家)	
1974	↓	自営業 (鉄工所)	
1975	自営業 (農家)	↓	
1976	↓	↓	
1977	↓	↓	
1978	↓	↓	自営業 (農家)
1979	↓	↓	↓
1981	農 家	?	?
1983	農 家	?	自営業 (鉄工所)
1984	?	?	↓
1985	農 家	?	?
1986	↓	?	自営業 (鉄工所)
1987	自営業 (鉄工所)	?	↓
1988	↓	?	自営業 (農家)
1989	自営業 (鉄工所)	?	↓
1990	↓	?	↓

た、零細な鉄工所が多く、夫婦でやっている、というようなところもある。さらに、鉄工所を始める土地は、後続者にあっては3例とも、もともと自分の所有していた土地である。

VI 鉄工所と集落での生活

表-1に掲げた通り、職業が別れ始めた1970年頃からの歴代の主要な町内会役員をみると、ほとんどが自営業である。これは、町内会の役員が、集落の世話をするものであるもので、時間が自由にならないと、様々な場面で支障が出てくる、ということによっている。例えば、平成2年度町民会館使用状況を見ると、大体が夕方からのものであるが、時には、町の保険相談センターの一般住民検診や、栄養指導など、昼から行われるものもあり、昼から世話をしなければならない。また、現在の町内会の協議委員7人のうち、3人が鉄工所の経営者であり、その他は、通勤労働者2人、農業1人、機場の経営者1人となっている。

こうしたことから集落の中で、現在はまだ特定の役についていない後続者の鉄工所経営者達が、次世代を担っていくことになるのではないかと、という期待が集落の住民の間にはある。秋祭りなどを率先して取り仕切っている人達の中に、後続者達の顔もみられたし、先駆者達の発言の中にも「次に吉原釜屋を担っていくのは彼等だ」というような発言が見受けられる。

また、町内会費⁴⁾などの面でも、どちらかといえば、「吉原釜屋は平等な集落だ」というイデオロギーが先行しているように見受けられるが、最近になって「鉄工所は儲っているはずだからもっと出すべきだ」という議論が起こってきているという。また、秋祭りの奉納金の名前を見ても、鉄工所の名前で出している人がいる。それは、周囲の人が鉄工所の経営者に抱く期待と受けとれる。

また、鉄工所仲間で集まって、飲み会をする、というのを数年前までしていた。その会を主催するのは、回り持ちであった。声を掛けるのは、吉原釜屋に家と鉄工所がある人で、例えば、鉄工所が吉原釜屋にあるが、家は大浜にある人までは声を掛けなかった、という。後続者は、先駆者に恩義を感じ、いまだに「いったりきたりしている」が、先駆者は、「平等」ということで、飲み会の主催を回り持ちにしようとする。これは、先駆者と後続者の面倒を見る、見られるという関係を示していると共に、先駆者の念頭には「平等」という観念があることを示している。

この様に、生活の中でも、周囲への気遣いや、仕事仲間や先駆者への敬意、そして平等感を重視することが、線引きの際に周囲との摩擦を避けて現在の位置に移動した理由の一つであるように思われる。

VII お わ り に

吉原釜屋の鉄工所は、住宅地域から出発し、その後の線引きの時期を経て、鉄工所が増えていったのであるが、この背後には、日本全体を覆っていた、繊維業界の不況と、高度経済成長の波が

ある。高度経済成長の時期の技術革新によって専門的な知識が労働者に要求されるようになり、工業高校で専門的な知識を身に付けた人が職場に入ってくるにしたがって給料が頭打ちになっていくことが、それまでの賃金労働者が自立して経営側に回るきっかけの一つとなっていると思われる。

その後、線引きの時期になると、周囲への気遣いなどから鉄工所の移動、そして、その時期に融資が受けられたことから鉄工所の拡張が起こる。吉原釜屋に後続者達が登場するのはこの時期である。このようにして、吉原釜屋にもともと住んでいた人達による鉄工所群は成立したのである。

ここで取り上げた様々な関係は、ある通時的な時間感覚によって成り立っている。しかし、それのみでなく、共時的な時間感覚によって成立する関係もあり得る。ここで取り上げられなかった共時的な時間感覚については、今後の課題としたい。

注

- 1) 現在吉原釜屋にある繊維関係の工場10軒のうち、吉原釜屋に昔から住んでいた人の経営する工場は、5軒ある。そして、3軒は、集落外の人の工場であり、2軒は、集落内に住んでいる人の工場であるが、昔からの住人ではなく、工場も隣接するほかの集落との境界辺りに位置する。吉原釜屋に昔から住んでいた人の経営する工場のうち、その人の代からはじめたという工場は2軒ある。そして、その2軒も、本家の仕事は工場であり、もともとそこで働いていた人達である。現在、そのうちの1人は、その兄弟の鉄工所の協同経営者ともなっている。

- 2) この時期に勤めに出ていた鉄工所は、情報に現れる限りでは、次の通りである。

(鉄工所名)	(所在地)	(業種)
中川兄弟鉄工所	大成町	機械工具
柳根上工作所	吉原釜屋	工作機械

『根上町史』 P. 528～P. 535

- 3) 『根上町史』 P. 576

- 4) 町内会費、いわゆる「万雑」は、「戸」という単位で計算し、一戸は20,000円である。家別に何戸とするかは戸別に見立てをするというのが建て前である。その見立ては、家や家財などを吉原釜屋においたままで他の土地に働きにいき、夏などだけ帰ってくるような人は0.5戸ぐらい、母子家庭などはそれなりに減らすし、分家は初年度は0.5戸で、それから毎年0.1戸ずつ増やしていくという。